

科目：国語

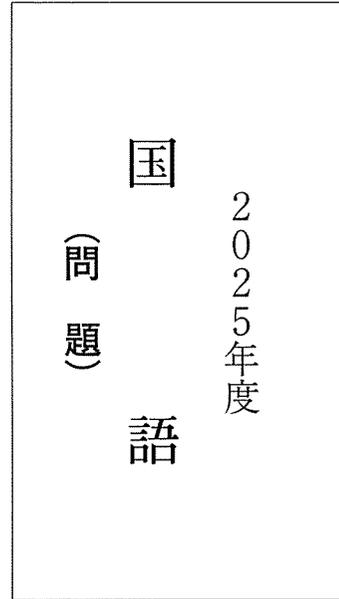
●問題冊子 8 ページ： ㊦ 問十三

設問に対する適切な解答がありませんでした。

当該箇所 of 設問につきましては、解答の有無・内容に

かかわらず、受験生全員に得点を与えることといたします。

以上



〈R07192016〉

注意事項

- 1 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
 - 2 問題は2～11ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
 - 3 解答はすべてHBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
 - 4 マーク解答用紙記入上の注意
 - (1) 印刷されている受験番号が、自分の受験番号と一致していることを確認したうえで、氏名欄に氏名を記入すること。
 - (2) マーク欄にははつきりとマークすること。また、訂正する場合は、消しゴムで丁寧に消し残しがないようによく消すこと。
 - 5 記述解答用紙記入上の注意
 - (1) 記述解答用紙の所定欄(2カ所)に、氏名および受験番号を正確に丁寧に記入すること。
 - (2) 所定欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
 - (3) 受験番号の記入にあたっては、次の数字見本にしたがい、読みやすいように、正確に丁寧に記入すること。
- | | | | | | | | | | | |
|------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 数字見本 | 0 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 |
|------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
- 6 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
 - 7 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離さないこと。
 - 8 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。
 - 9 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。
 - 10 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

マークする時	● 良い	○ 悪い	○ 悪い
マークを消す時	○ 良い	○ 悪い	○ 悪い

次の文章は、近代日本における家族の形態に生じた変化について論じた本から抜粋し、一部を改変したものである。なお、この文章は、戦前の映画文化が若い世代に支持された状況の説明に続くものである。これを読んで、あとの問いに答えよ。

ただし一方で1920年代以降、年少者たちが自分で稼ぎ、その金で活動写真にいくことを押しとどめる動きも強まり始める。そうした力の発生と深くかかわったのが、その時代の都市に拡がり始めていた「小家族」という生き方である。¹【イ】

この小家族の形成の前提になったのが、1910年代なかば以降の賃金上昇だった。第一次大戦にもとづく空前の好景気のなかで賃金上昇が加速した。斎藤修によれば、1882年から1914年までは実質賃金の年平均増加率は0・7%にとどまったのに対し、14年から20年にかけては7・5%という驚異的な伸びがみられた。賃金の平均増加率は、その後、不況によって鈍化するとはいえ、1937年まで1・5%の成長率を維持したのであり、100年単位でみてもこれは未曾有の成長だったとされる。

こうした大幅な賃金増加の後押しされ、都市では金銭の支払いに依存したあらたな暮らしが展開され始める。なかでも重要になるのが、親から多かれ少なかれ独立し、夫婦とその子どもを中心で暮らす、独自の生活構造が確立されていったことである。戸田貞三は1920年の『国勢調査』を分析し、全国の都市部の家族の形態として、配偶者だけの家族と、親と未婚の子からなる家族を足すと66・3%となり、さらに農林水産業に世帯主が従事する家族を除くと72・9%になることを確認している。戸田はこうした家族を「小家族」と呼び、それを当時の日本の家族の代表的類型とみなした。戸田は、小家族を「忠実に考察することによって、真に家族に固有なるものに容易に近づき得る」代表的な家族のかたちと捉えたのである。²【ロ】

もちろん戸田が統計上取り出した小家族に、都市で貧しく暮らす破片的な家族が一定数含まれていた可能性も否定できない。それ以前、都市で親と未婚の子だけからなる家族が、珍しかったわけではない。近世都市には家からの欠落や出稼ぎ、または丁稚に入るために来た流入者が多数集まっていた。こうした人びとは、経済的困窮や晩婚のせいで、都市で不安定な暮らしを送りつつ、あまり子どもを産まず、世代の再生産ができないまま消える場合が多かったのである。

しかし20世紀には都市を中心とした市場の拡大や企業の勃興にかかわり、多くの家族がそれまでとは異なる安定性を手に入れ始めることになった。大橋隆憲の推定では、公務員や労働者などおもに賃金をもらい生活していた世帯の割合は、1888年の10・7%から1898年の24・2%、1909年の33・0%まで、20年余りのあいだに3倍以上も増大した。そうして給与生活を営む人びとを顧客として、中小商店を営む人びとも増えていく。とくに日清・日露戦争を契機として景気が浮上したことにともない、1888年に全国の世帯中3・7%だった商工の自営業者の割合は、1898年には4・9%、1909年には6・2%と倍近くにまで増大したのである。

流通する貨幣に依存して、³こうして相対的に安定した「私生活」を送る家族が増加していく。⁴【ハ】
それをひとつに示すのが、東京市における世帯人員の安定である。1880年代に一戸あたりの平均人員は急上昇した後、1890年末以降下降し、1910年代以降3・8人程度に収束する。これを中川清は、小家族が都市生活の基本的なユニットとして自立していく過程を表現しているとみなした。中川によれば、明治中・後期までの貧民はそもそも「家族であること自体に貧しく」、集まっては離散する不安定な集団を形成していた。⁵

人員数に大きなばらつきがみられたのだが、19世紀末からの都市の経済的成長にともない、家族生活は次第に安定していく。子どもを早いうちから丁稚にだすといった生活もかぎられたものになり、そのため一度は世帯人員は増加したが次には他家に逗留する人も減ることで、世帯人員は小規模で安定していったというのである。

20世紀に入る頃には、⁴小家族はこうして「破片」⁵的性格を脱して、私的なユニットとして自立し始めた。それをよく示すのが、いわゆる新中間層的なライフスタイルの拡大である。

そもそも未曾有の賃金上昇と並行し、都市では「俸給生活者」、「サラリーマン」、「白襟労働者」、「小ブルジョワ群」、「中流階級」、「中間階級」などと呼ばれるあらたな集団が注目を集めていった。門脇厚司らはそうして近代的産業部門で俸給をもらい暮らす就業者を「新中間層」と総称し、その集団が1920〜30年代に急増したことを確認している。新中間層に含まれる就業者は1920年の107万人から1930年の198万まで全国で1・86倍に増大し、1940年には359万人とさらに1・81倍増加したというのである。⁶【ニ】

増加は大都市、なかでも東京で目立った。同じく門脇らの推定によれば、東京府で1920年には新中間層に属す就業者は19万6000人だったのに対し、1930年には31万1000人、1940年には48万9000人に達する。そうして東京府では全就業者のうち新中間層は1920年に12・9%（全国では4・0%）を占めていたのに対し、1930年には13・5%（全国では6・7%）、1940年には19・7%（全国では11・4%）と、無視できない勢力にまで拡大したのである。

それを前提に、企業や公共団体から安定的にあたえられる給与を用い、あらたなモードをいち早く取り入れ、次々と商品を消費していくいわゆる「新中間層」的暮らしが膨張していった。市場もそれに応じて拡大していく。たとえば百貨店は、呉服店などの先行業種から富裕層を得意先として受け継ぎ、それまで経営されてきた。しかし1920年代頃には百貨店は、中流階級以下の人びとまで積極的に顧客として取り入れ始める。三越が1919年大阪で「さかえ日」、東京で「木綿デー」と名づけ衣服を特売し、また1922年より三越マークを開設して日用品等を廉価販売し始めたように、都市を生きる新中間層の家族にまで百貨店はターゲットを広げていったのである。

そのひとつの証拠になるのが、百貨店の立地の変化である。旧市街に位置した本店とは別に1920年代から30年代にかけて阪急百貨店や伊勢丹、東横百貨店は、梅田や新宿、渋谷といった都市のターミナル駅周辺にこぞって出店し始める。旧市街に暮らす有閑階層ではなく、「郊外」に住み、仕事のために通勤を続ける都市の新中間層を百貨店は客として取り込み始めたのである。

加えて新中間層の消費生活の変化を示す現象として、電化生活の急速な普及が興味深い。まず電灯が家庭でも1910年代以降一般化し、すでに1929年には全国の93%の世帯で電灯契約がむすばれていた。当初の電灯契約は、多灯数の契約が可能な大都市の富裕層を中心としていた。しかし世帯あたりの平均契約灯数は1910年代末まで減少し、その後緩やかに増加していくことからみて、部屋数の少ない中下層の世帯が次第に電灯契約の主力になるとともに、そうした世帯でも契約数が増加していったと考えられる。

それを踏まえ、1920、30年代には各種家電も普及し始めた。電灯使用の夜間の偏りを解消することを狙って、電気会社は値下げやキャンペーンを始め、家電の普及を促したからである。

そのおかげもあって、1930年の東京での調査では、すでに35・8%の契約者世帯がアイロン、21・7%が電気スタンド、22・5%がラジオ、13・7%が扇風機を所有していたとされる。これは5灯から10灯を備えた家を対象にした調査で、実際の普及率より高い数値が出ているとみられる。ただし1910年代後半には、1灯の電灯契約で複数の家電使用を可能にする「二灯用クラスター」もすでに拡がっていたことからみても、家電を複数買い利用する生活が当時、広範に拡がり始めていたことは否定しがたいのである。

以上のように拡大していく消費市場に引きずられながら、小家族的暮らしはたんに破片的なものを越えた、一定の實質を担い始める。消費市場の拡大を追い風として、衣服や家電などを次々と消費していく生活が送られ、それが場合によっては階層を越え、理想的な生活とみられるようになったのである。寺出浩司は、1920年代はじめに大阪でおこなわれた調査に依拠し、工場労働者たちが余暇を野球やテニスなどのスポーツに費やすなど、新中間層に似たライフスタイルを身に着けていることをあきらかにしている。行楽に出かけスポーツを楽しむ、繁華街で映画をみるような小家族的暮らしが、一種の背伸びとして多くの人びとに受け入れられ始めていくのである。

とはいえ具体的にみれば、新中間層のライフスタイルを身につけた小家族的暮らしは安楽だったとばかりはいえない。第一の問題は、その生活が景気の影響を受け、たやすくユラいだことである。たしかに小家族は、企業の勃興や膨張する貨幣流通を追い風として、出自となる家や隣人に依存しない比較的安定した生活を築いていくことができた。だが裏を返せば、それは景気の変動で容易に生活が浮き沈みしたことを意味していた。景気が悪くなれば、他に頼るところのない小家族的暮らしは途端に厳しくなったのであり、さらに男性稼ぎ手が誅首されたり、病気となったりすれば、一家の家計は一気に破たんしたのである。

実際、1920年代以降には賃金上昇が鈍化する傍ら消費者物価指数が急騰し、その後、高止まりするなかで、小家族の生活は途端に苦しいものに陥った。新中間層のライフスタイルを維持することがむずかしくなったのであり、**A** 節約も求められた。小山静子によれば、1910年代末には、家計を合理的に運営することを求める「生活改善」ブームが女性誌を中心に起こる。そうした運動は一定の波及をみせ、1910年代末には、物価高騰で困窮した新中間層が飲食物費や被服費を切り詰めるという現象も確認されたのである。

とはいえ儉約生活には限度があった。小家族は、流行の商品を消費し続ける新中間層的ライフスタイルをとるかぎりでは、自分たちがたんなる破片的家族ではなく、理想的な都市生活を送っていることを自他に對して初めて証明できた。そのため何もかもを節約することは、自分たちの存在価値そのものを否定することにつながりかねなかったためである。

こうしたなかで第二に小家族は、いかに年少者を処遇するのかわかるといふ課題を抱えていく。ひとつに年少者がしばしば家の家計を考えず、好きに買い遊ぶことで小家族をオビヤカしたためである。家計がそれによって苦しくなっただけではユルがせたことであつた。小家族は、市場とかかわり何らかの「趣味」を維持することで、自分たちが社会のなかで一定の地位にあることを主張していく。しかし年少者は、活動写真館でまさにそう振る舞つたように、しばしば異なる階層や年齢の者と交わることで、親たちが維持しようとしていた暮らしの枠をたやすく乗り越えてしまふのである。

こうして **B** として現れる年少者を、しかし小家族は容易には手放せなかつた。小家族は、**C** につながる祖先やその代理としての親から距離を取るあらたなライフスタイルをつくりだす。そのため **D** に対する期待も大きくなつた。小家族は、彼・彼女らが置いてきた **E** 以上の価値をもつ実質としてあることを、**C** ではなく輝かしい **D** によって証明しなければならなくなつたからである。

A 小家族は、年少者を早くから他家に働きに行かせるような生活構造を改める。たとえば中川清によれば、明治中期のある街では15歳未満の男子細民の50・4%、女子の79・5%が職をもち、そうして若いうちから職業生活に入ること、家を出て戻らないことが普通だつた。だが20世紀になると年少者の有職率は一気に下がり、たとえば明治末から大正初めのより一般的な調査では15歳未満の有職率は男子6・9%、女子61・3%までに落ち着いている。それを一例として、年少者は親に依存し、同じ家で長期間寝食をともにすることが普通となつたのであり、そのおかげで小家族も年少者が小さいうちに維持されるだけの短期間のまとまりではなくなつていく。小家族は、年少者を自分たちのうちに深く取り込むことで、年少者が自分たちが築いたライフスタイルを世代を超えて継承してくれることを期待し始めるのである。

年少者を手放さなかつたことには、さらに経済的な理由もあつた。退職金や年金制度、また高額な生命・医療保険などの制度がなお薄弱な20世紀前半には、高齢化した家長は、成長した子どもにしばしば経済的に依存した。たとえば伊賀光屋の分析では、1920年前後の大阪の職工の場合、高齢化すると収入が減少したが、それを成長した子どもが同居し補うという稼得構造がみられたのである。

こうして複合的な理由が重なることで、20世紀前半の小家族には、親子関係を以前より親密に、また長期間維持することが求められた。将来も子どもを自分の家族の周囲にとどめたいのなら、できるだけ寝食をともにし、幼少期から関係を深めていかなければならない。そのために年少者を小さいうちから他家にやり、手放すような生活は否定されていくのである。

(貞包英之『サブカルチャーを消費する』による)

問一 二重傍線部 a～c の片仮名を、漢字(楷書)で解答欄に記入せよ。

問二 傍線部1「その時代の都市に拡がり始めていた「小家族」という生き方」が傍線部2「1910年代なかば以降の賃金上昇」によりもたらされたとはどういうことか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 「小家族」は今日の日本社会で一般的に言われる核家族を指し、その形成は世帯収入を子どもたちの労働に依存する必要がないことが前提であつたということ。

ロ 「小家族」は、従来の家族とは異なる安定性を生活基盤にもち、それは拡大する市場経済の動向と無関係だつたということ。

ハ 「小家族」は、配偶者だけの家族と親と未婚の子からなる家族を指し、その形成は都市の経済成長により可能になつたということ。

ニ 「小家族」は、血縁や地縁に頼らずとも生活の安定が得られるものであり、その安定は経済成長により支えられていたということ。

問三 次の文章は【イ】～【ニ】のどこかに入るものである。最も適切な箇所を一つ選び、解答欄にマークせよ。

企業や顧客からもらう金を資金として、 magari なりにも清潔で余裕のある住居を確保し、親戚や近隣の人びとにあまり気遣うことのない暮らしがめずらしいものとはいえなくなっていくのである。

問四 傍線部3「相対的に安定した「私生活」に該当しないものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 商品消費していくいわゆる「新中間層」的暮らし
- ロ 出自となる家や隣人の援助を前提とした生活
- ハ 繁華街で映画をみるような小家族的暮らし
- ニ 行楽やスポーツといった余暇を楽しむ生活

問五 傍線部4「小家族はこうして「破片」的性格を脱して、私的なユニットとして自立し始めた」とあるが、破片的

な性格を持つ家族の説明として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 破片的性格を持つ家族とは、経済的事情から成員の教育水準が低くなり、生活の困難から将来への見通しを持つことができない特徴を持つ。
- ロ 破片的性格を持つ家族とは、近代化過程で生じた階層変動の影響を強く受け、故郷喪失意識から利他的な生活様式を展開する特徴を持つ。
- ハ 破片的性格を持つ家族とは、集まっては離散する不安定な集団であり、主に経済的事情から生活の安定が保証されないため、世代の再生産ができない特徴を持つ。
- ニ 破片的性格を持つ家族とは、伝統的な生活様式への抵抗を持ち、資本主義経済化に順応することから都市へ流入した人々を代表する特徴を持つ。

問六 傍線部5「いわゆる新中間層的なライフスタイル」とあるが、こうした生活様式を実現した階層の説明として、最も適切な表現を一〇字以上二〇字以内で本文から抜き出して解答欄に記せ。

問七 傍線部6「自分たちがたんなる破片的家族ではなく、理想的な都市生活を送っていることを自他に対して初めて

証明できた」とあるが、なぜ証明する必要があると考えられるか。その説明として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 経済的困窮により世代の再生産を諦めるしかない状態ではないことを確認するため。
- ロ 新中間層的なライフスタイルは消費生活を充実させることで家族の幸福を約束するため。
- ハ 生活の安定が約束されない破片的家族であることは精神的な安定も手に入れられないため。
- ニ 旧来の伝統から切断された自分たちのアイデンティティを消費生活によって確保するため。

問八 空欄Aには共通の語句が入る。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ もちろん
- ロ その一方で
- ハ だからこそ
- ニ しかし

問九 空欄B、C、D、Eに入る単語の組み合わせとして、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ B―他者 C―過去 D―未来 E―家
- ロ B―放縦 C―過去 D―今後 E―夢
- ハ B―未知 C―伝統 D―立身 E―家
- ニ B―周縁 C―伝統 D―将来 E―夢

問十 傍線部7「将来も子どもを自分の家族の周囲にとどめたいのなら、できるだけ寝食をともにし、幼少期から関係を深めていかなければならない」とあるが、その理由の説明として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 故郷喪失意識を克服するため
- ロ 伝統的生活様式への郷愁があるため
- ハ ライフスタイルを継承するため
- ニ 家族的共同体意識を強化するため

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

今日しも時雨めくころにて、都を隔ててのつとめての日は、伊勢路近き所、甲賀の郡といふ所に宿りぬ。「ここも近江の国なり」と聞くに、夜一夜、石山の方、三井寺の方の行く雲をなん、在五の朝臣のごと、「うらやましく」などとひとりごちぬる夜、まれなる草根の枕、いとど菩提のため、寝聴きにも、明けがたき夜もやうやう所々残んの雲もはづかしきほど白みはてたり。

急ぐべき道ならず。宿のあるじ、「尼前の修行、**A**。供とする人もなしや」とつぶやきがちなり。日も高くさし昇るに、時雨の雲競ひ来て、「蓑笠をも領せぬを」とて、いづちとも知らぬ道行き人の老いたるに**B** 調じて、連れなひつつ行くに、そこらの道の案内よくぞ知りたるにや、答ふるにむくつけからず。

都を出でて日数も忘れにたるかは、今日、いくつの日を来りけむ。伊勢の海づら澄みわたり、かの舞ひ人の返す袂なぞ、そのかみの内裏住もいたりてをかしかりけん。

鳴海といふ宿を過ぎにたるに、それより駅伝ひを遥かに行き過ぎて、三河の国と名のみ聞きしをなん、聞きまがふもうしろめたきに、八橋の蜘蛛手も朽ちにたるに、青柳の面影絶えて枯れたる落ち葉、こころ水に浮かびてをかしきに、思ひ続くるも胸痛しかし。

もの思ふ蜘蛛手の水に **C** 枯れ枝の柳面影もなし

小夜の中山といふに、うち続き山重なりて、いづら、上中下の隔て、弁別なし。

駿河の国、宇津の山に参上るに、我にあひ知れる修行者も乏しく、蓑笠も朽ちにたるに、かたへの巖に腰うちかけて休らひぬ。

1 宇津の山うつつも夢も同じ世につひの別れやいつと定めん

清見が関を越ゆるに、旅の心細さ、所につけたる物、心のなぐさみにとて、海藻刈りて帰る女にや、我に得させぬ。「言葉の横訛らぬを」とて、「都の人」と言ひ興じて、「鶴の毛衣も露うち払ふすがぞ」とて、ここに一日二日休らひて遠く見やれば、足柄の高嶺、雲覆ひ、老いたる脛の及ぶべき節もあらじかし。

浮島が原までは道行く人に助けられて、ゆくりもなき旅になんありぬることよ。今日、雪、霰降り凝りて藁沓おもだたしきに、**2** 苦屋の里に聖の行ひすまして居侍るに、今年はここにて年を送りぬ。

※冬のうちにはいかでか、とて聖の房に籠もりて、薪積み、水溜むるたづきもなく、ただ泣する心づかひもむなしきに、明日は年の返る日なりとて、松に櫓を立て添へ、魂祭る優婆塞の翁、優婆夷のおもとだつも、この聖の房に來りつどふに、その夜、海いかめしう鳴りて、浜風激しく、吹き寄せたる真砂、雪をこぼすやうに立ちこみたるに、まさなの雪も降りぬ。灯し明かすとや、松に火を吹きたためて、あたたため酒を、かの優婆塞の翁、むくつけき鬚に吹きつつも飲みほしぬ。小夜もふけ過ぎて、麓の里に、とみのこととて突立ちのぼりて、見るがうちにいくらかありけん、その里、皆灰になりぬべし。聖、明日のつとめをも思ひ寄らずして、念仏して明かすに、春といへども行き来も少なく旅立つ男も見えず、雪も昼のごと降りこめたり。*

とかくして、如月のころも過ぎ、弥生の空はここもといへども、花も栄ゆ。鳥の翼も霞に籠めて鳴き囀るは、心のどかなり。

弥生の中の十日の夜、まどろむ心もゆくばかりなるに、まさしくも弥陀の来迎かしこきものから、「東瑠璃の国に生まれよ」との御教へある心地して、覚めぬるままに、あるじの聖に暇たまはりて、陸奥の旅に思ひ立ちぬ。

(『松嶋日記』(清水浜臣旧蔵本)による)

(注) 夜一夜：「よひとよ(夜一夜)」から転じた語。

在五の朝臣：在原業平のこと。

「うらやましく」：『伊勢物語』七段にみえる歌、「いとどしく過ぎゆく方の恋しきにうらやましくもかへる波かな」による。

尼前：「尼御前」から転じた語で、尼の敬称。「あまごぜ」とも。

八橋の蜘蛛手：「伊勢物語」九段では、「八橋」の名について、川が蜘蛛の足のように八方に分かれて流れているため、八つの橋を渡していたことに由来すると語られている。

宇津の山：「伊勢物語」九段では、この山にまでやって来たところ、先の道が暗くて狭いため心細かったもの、かねて見知っていた修行者に出会えたということが語られている。

薬沓：「わらぐつ」のウ音便形「わらうづ」から、さらに撥音便化した。草鞋のこと。

汙する：洗髪すること。

優婆塞：在家のまま仏門に仕える男性。

優婆夷：在家のまま仏門に仕える女性。

東瑠璃の国：東方淨瑠璃世界と同じ。薬師如来のいる浄土のことで、瑠璃のように清浄であるという。

問十一 空欄

A

B

C

解答欄にマークせよ。

A イ いまいましきぞ

□ おほつかなしや

ハ 心にくきことよ

ニ さりがたきにや

ホ らうらうじきにこそ

B イ 借り

□ 差し

ハ 開き

ニ 寄り

ホ 渡し

C イ 聞きまがふ

□ 朽ちはつる

ハ 澄みわたる

ニ 散り浮かぶ

ホ 混じり合ふ

問十二 二重傍線部イ、ホそれぞれの「の」のうち、同格の用法に相当する助詞を一つ選び、解答欄にマークせよ。

問十三 傍線部Ⅰの和歌にみられる修辞技法についての説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

Ⅰ クセよ。

イ 「うつつ」に「打つ」の意味を掛けている。

□ 同音の言葉を導き出す序詞が用いられている。

ハ 反語表現により別れの悲しみを強調している。

ニ 枕詞を用いることで歌の調子を整えている。

ホ 「別れ」と関連する縁語が用いられている。

問十四 傍線部2「おもだたしきに」の解釈として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 「藁沓」が凍ってしまつて冷たい様子を表す。

□ 「藁沓」が役立って面目を保つたさまを表す。

ハ 「藁沓」全体がぼろぼろになったことを表す。

ニ 「藁沓」の裏側が反り返っている状態を表す。

ホ 「藁沓」を新品に換えたいという要望を表す。

問十五 二つの※で挟まれた段落（冬のうちには）「降りこめたり。」の中に「さらに驚かず、」を挿入するとすれば、その箇所はどこが最も適切か。直後の三文字を本文中から抜き出し、解答欄に記せ。ただし句読点は字数に数

えない。また、振り仮名がある場合は付さないこと。

問十六 本文の内容と合致するものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 甲賀の郡も近江の国内であると知らされたとき、石山寺、それに三井寺という近江の国の有名な寺を参拝しなくなった。

ロ 陸奥への旅路は急ぐものではなかったが、道案内をしてくれる老人のおかげで予定よりも早く伊勢の海辺に着いた。

ハ 三河の国では、『伊勢物語』に出てくる八橋の蜘蛛手が目の前に見えたとき、在原業平の東下りの悲しみを思いやって胸が痛んだ。

ニ 聖の房では、水も十分に使えないほど不便であったが、年が明ける前の日、優婆塞と優婆夷がやって来て必要なものを提供してくれた。

ホ 聖の房では、年の内から翌年の三月中旬まで過ごしたが、弥陀来迎の夢を見たことがきっかけとなって、陸奥への旅を決心した。

三

次の文章は、明治二十四（一八九二）年、衆議院議員を辞職したばかりの相手に宛てて日本人がしたための漢文体の手紙の一節である。これを読んであとの問いに答えよ（設問の都合上、訓点を省略した部分がある）。

某也抱志懷道、為日久矣。幸遇中興之運、冀得涵泳至
 治、皞皞乎擊壤鼓腹、以没于地上。何謂有司誤其謀、
 所以輔世敷治者、一循秦政漢莽之跡、而其務倍斂浚
 膏血、則遠過於宋安石王氏。二三大臣、皆爭增飾邸宅
 衣服器皿。所以奉身者、莫不極華侈。出納之際、君取一、
 臣取二。燕游之費動至一夕而糜千金。非独此也。或飲
 博連日夜、及有意千紀。若過而及於罪、有不可赦宥者、
 初非自裁以為謝。又未嘗聞有引咎自屏黜刑典亦無
 有董治之。仍賜數千金之俸、優游偃蹇、以終其世。而下
 僚賤隸、則往往有獲罪罹禍者。問之則曰、取則於歐邏
 巴焉。夫歐邏巴或有之。然在我東方、自古未有如此之
 妄濫而無忌者也。举世人民以其如此也、亦皆尚姦詐、
 凌人自利、無復廉讓之風。一歲甚一歲。乃訛曰、盪滌吾
 邦陋習、漸進人高明之域。嗚呼、世道民心之壞、蓋
 至此而窮矣。

〔藁谷遺稿〕による

(語注)

中興……ここではいわゆる明治維新政府の樹立をいう。
 擊壤鼓腹……鼓腹擊壤に同じ。平和で安楽な治世を楽しむこと。
 優游偃蹇……おごり高ぶって優雅に暮らすさま。
 歐邏巴……ヨーロッパ。

問十七 傍線部1「有司(ウシ)安石(アノイ)王氏」の内容として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 新政府の下で官職についた者が計画を誤って経済活動の助成や行き届いた政治を実現できなかったため、始皇帝や王莽のような王安石以上の独裁政治が横行した。

ロ 役人たちの誤算は、経済活動を支援し健全な政治が行われたために、民衆の誰もが始皇帝や王莽をはるかに凌駕する王安石を模範とするようになったことであった。

ハ 官位にあるものは次々に計画を変更して、始皇帝や王莽のような為政者の足跡を追ったので、市民にとっては酷烈を極める政治を行った王安石の手法にほとんど変わらない非道な結果となった。

ニ 役人たちは経済活動を助成し、よい政治を実施する計画を誤り、始皇帝や王莽のやりかたを見習って、重税を取り立てるようになったが、その程度は、北宋の王安石をはるかに凌ぐ悪辣なものであった。

ホ 新政府の下で官職についた者は、当初経済活動を支援し庶民の生活を守る計画に失敗したが、ひたすら始皇帝や王莽の政治制度を手本として、王安石をはるかに凌ぐ立派な政治を成し遂げた。

問十八 傍線部2「所(ニ)以(テ)奉(ス)身(ヲ)者(ハ)、莫(シ)不(ル)極(メ)華(ヲ)侈(ヲ)」の内容として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 住居・服飾・家具食器などの財産を役人は奉公する際に公に預けるようにした。

ロ 奉公しようと思いついた役人は、あらゆる方面で生活の贅沢を極力抑えた。

ハ 国家に奉公した役人は、生活において贅沢の限りを尽くす者ばかりであった。

ニ 国民が天皇に奉公するに当たり、役人は生活が華美にならぬように制限した。

ホ 役人たちは貴族の華美な生活に終止符を打てるように改革に一身を捧げた。

問十九 傍線部3「燕游之費動至一夕而糜千金」を書き下し文に直して、すべてひらがな表記にした場合に最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ あそびのつひえをえんしてどうしていつせきせんきんをつひやす

ロ つばめのあそびはひどうにゆきてしいつのゆふべにしてせんきんなし

ハ えんいうのひはどうじていつせきにいたりてせんきんはなし

ニ つばめのあそびのひどうはいつせきにいたりてせんきんをつひやす

ホ えんいうのつひえやもすればいつせきにいてせんきんをつひやすにいたる

問二十 空欄 4 に入る漢字一字として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 邦 ロ 華 ハ 内 ニ 西 ホ 世 ヘ 日

問二十一 本文の内容と合致しないものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 新政府の下で筆者はその行き届いた政治に満足して人生を終えるつもりでいた。

ロ 薩長藩閥の政治家や官僚は飲酒並びに賭博といった遊興をあくことなく続けた。

ハ 新政府の政治家や官僚は許されぬ罪を犯しても自決して罪を償おうとはしない。

ニ 薩長藩閥の政治家や官僚の中には自ら罪を認めて蟄居して反省する者はいない。

ホ 新政府の下級官僚達の中には欧邏巴の法律を理由に自身の罪を認める者もいた。

〔以下余白〕

